

〈研究ノート〉

歌い継がれなくなった校歌 —閉校式フィールド・ワークを通して—

宮島 幸子

広島県尾道市にある因島で2015年3月、島内にある3つの小学校が児童数の減少にともない閉校することになった。3校とも100年以上の歴史があるが、校舎とともにそこで育まれた学校文化も消えてしまうことになる。校歌は学校文化の大きな要素である。「歌い継がれなくなった校歌」について、閉校式のフィールド・ワークを通して校歌の文化的役割について考察した。

キーワード：閉校式、校歌、尾道市因島

1. はじめに

少子化に伴い全国の小・中学校の統廃合が問題になっている。尾道市因島の南部にある小学校3校が2015年3月で閉校になった。閉校にともない校舎だけでなく、その学校で育まれてきた伝統や文化もなくなっていく。学校文化の一つであり、日本独自といえる校歌も閉校に伴って歌われなくなる。「歌い継がれなくなった校歌」ではあるが、その学校を後にした卒業生たちにとって、在学中に歌った校歌は思い出として、その学校に通った証として人生の応援歌になりうるのだろうか。閉校式に参加した人たちから、校歌の存在意義を尋ねた。

2. 尾道市因島と児童数

因島は面積33.73 km²、海岸線長126 kmの瀬戸内海に浮かぶ島である。1953年（昭和28年）5月1日に御調郡の田熊・土生・三庄各町および大浜・重井・中庄各村、豊田郡東生口村が対等合併して因島市になり、島が一つの市として成立した。しかし、2006年（平成18年）1月10日に隣接する豊田郡瀬戸田町とともに尾道市に編入され尾道市因島となる。

因島は造船業が盛んで、1960年代後半から1970年代初頭にかけて繁栄を極め、1970年には因島市の人口は41,729人と近年最高の人口増を示した。しかし、オイルショック以降の不況により、1987年には日立造船が撤退した。1988年因島大橋が開通し、本土と24時間往来できるようになったが、人口は衰退の一途をたどり、2012年の国勢調査での調べでは、25,673人と1970年代の最盛期の人口からすると5分の3と大幅な減少となった。この現象は当然児童数の減少にもつながった。造船所が多くある地域に位置する土生小学校では、1958年2,355名をピークに、徐々に児童数は減少していった。造船業が盛んであった1960年は児童数2,154名であったが、日立造船が撤退した1987年は児童数669名、2014年は児童数216名となり¹⁾、2015年3月土生小学校は142年の歴史の幕を閉じることになる。この現象は造船所のある土地域だけではなく、因島全島に及んだ。因島の南部に位置する土生小学校はじめ田熊小学校、三庄小学校が閉校し、因島南小学校として統廃合されることになった。

3. 三庄小学校・田熊小学校・土生小学校の閉校式

三庄小学校は2015年3月21日の10時から閉校式が開催された。続いて同日13時30分から田熊小学校の閉校式が開催された。土生小学校は翌日3月22日9時30分から閉校式が開催された。

3校の学校の歴史と閉校式典の概要を表1にまとめた。

表1に見るように、式次第は3校とも同じである。各学校のパンフレットやオリジナルのファイルには校舎の絵や人文字の航空写真とともに校歌の歌詞が印刷されている。

三庄小学校、田熊小学校の式典は体育館に並べられた席は満席で、立ち見の参加者も多かったが、土生小学校は、来賓席も空席が目立ち、一般席も空席が多かった。土生小学校の場合、校庭には、保護者や地域主催の閉校記念行事が同時進行で行われていたことが体育館の式典出席者に関係したのではないかと考えられる。3校の中では一番にぎやかで、餅つき、焼きそばなど多くのテントを張った中で行われ、屋内行事より屋外行事に人が集まっていた。

長い歴史を持つ3校の閉校は地域の人たちにとっても、かつて経験のない出来事に、感慨ひとしおだと涙を浮かべていた人もいた。参加された人の中にはLINEで閉校を知り閉校式に参加した方もいて、情報の在り方にも時代の推移を感じた。

3校の閉校式にはそれぞれ特色があり、田熊小学校は7年連続NHK合唱コンクールに出場した実績があり、音楽に力を入れた学校方針²⁾が閉校式にも生かされ、先生はじめ児童の歌を歌う表情は輝いていた。演出も工夫され、児童は歌いながら出席者と握手したり、歌いながら体育館を走ったりと盛り上がりを見せた。また、サ

ウンドグループ「ハバネロ」の演奏では、男子児童から声援が上がり、全児童からは手拍子が体育館に響いた。

三庄小学校は各々の合唱団、総勢140名の歌が披露され、地域との連結の強さを感じた。

土生小学校は屋外でのイベントに保護者はじめ地域の役員が思い出を作ろうと、餅つきや食事のふるまいがあった。土生小学校閉校記念事業に携わった方は「みんなの学校を大前提に輪を広げ、役割分担した」「閉校記念誌作成、閉校式の行事を推進していくなかで、土生小学校出身である保護者と土生小学校出身でない保護者とは考え方が異なり、温度差が大きいところが難しかった」また「閉校記念誌は閉校行事の写真も掲載したかったので発行が5月になった」と話してくれた。

4. 閉校式は歴史的瞬間

毎月JA会員各戸に配布される『JAおのみち』2015年3月号に「時感旅行記 いつか見た風景」というコーナーに昭和45年に撮影された三庄小学校の航空写真が掲載され、「尾道市立三庄小学校は因島の南東部に位置し、現在、128人の児童が通う明治8年創立の小学校です。当時は800人が通っていました。この写真には、旧三庄保育所、三庄幼稚園、旧因島農協三庄支所も写っています。柑橘栽培が盛んで、まだ、田んぼもあり、春になるとレンゲが一面に咲いていました。三庄小学校は平成27年3月末で閉校し、4月からは隣接する土生・田熊小学校と統合し、因島南小学校となります。人の心の中に残る記憶は何時までも消えることはありません。三庄小学校に思いをはせる皆様、何時か友と故郷を語り合う日まで心の中にしっかりと刻んでおいてください³⁾」と記されており、学校というコミュニティは心に残る記憶の場所であり、地域の共通

表 1 閉校記念式典の概要

	三庄小学校	田熊小学校	土生小学校
創立	明治 8 年 8 月	慶応元年	明治 6 年 3 月 1 日
沿革中の校歌制定の記載	昭和 29 年 10 月	記載なし	記載なし
作詞	葛原しげる	葛原しげる	葛原しげる
作曲	山本雅之	弘田竜太郎？ 引田龍太郎？	小松耕輔
生徒数	129 名	166 名	124 名
閉校記念誌	発行	なし	発行
式典参加状況	満席・立ち見	満席・立ち見	空席が目立つ (屋外行事も同時開催)
式次第	尾道市教育委員会	尾道市教育委員会	尾道市教育委員会
閉校記念式典	三庄小学校 閉校実行委員会	尾道市立田熊小学校閉校記念式典委員会	尾道市立土生小学校閉校行事実行委員会
内容	①記念碑除幕式 ②全校児童合唱 ③開会挨拶 ④記念講演 (大林恒彦) ⑤町民合同コーラス ⑥全員合唱 ⑦ひまりコンサート ⑧子供げんか神輿 ⑨消防車見学 ⑩風船飛ばし ⑪閉会挨拶	①記念碑除幕 ②風船飛ばし ③オープニング演奏 ④田熊小学校合唱部 ⑤田熊小太鼓 ⑥全校合唱	①記念碑除・歌碑幕式 ②来賓紹介 ③タイムカプセル受け渡し ④思い出のステージ(ポルノ グラフィアーからのコメント) ⑤思い出の上映会 ⑥もちつき ⑦食事及び校内見学 ⑧因島村上水軍陣太鼓 ⑨バルリオンリリース ⑩閉会挨拶
パンフレットには	校歌 文部省唱歌「ふるさと」	校歌	校歌 土生小学校 思い出のアルバム
演奏参加者	地域有志コーラス(140名) ひまり	バンド「ハバネロ」 6年担任が「ハバネロ」のドラム担当 田熊小学校合唱部 全児童が中心	土生っこコーラス 地域の人合唱団(80名) ポコアポコ
式典で歌われた曲	Believe つばさをください 巣立ちの歌 ふるさと(嵐) 文部省唱歌「ふるさと」 校歌	負けないで ヘビーローテンション ヘイヘイ ポッキー フライングゲット 紅色(合唱部) 森の贈り物(合唱部) 校歌 第2の校歌「みやまかいの歌」	地球星歌 ありのままで ふるさと 思い出のアルバム この街で

の空間でもある。記念誌に寄せられた卒業生の記事にも、移りゆく地域の風景が書かれ、地域の行事、子供の頃の遊びなどが懐かしさと共に記されていた。

三庄小学校には、木造校舎が残っている。1995

年には大林宣彦監督の「あした」のロケ地になった。木造校舎には郷土資料室もあり、古い生活道具などが並べられている。

閉校記念行事には大林監督はじめ140人の地域の合唱団が閉校式を感慨深い雰囲気にした。

午後は、因島出身の男性デュオ「ひまり」のコンサート・子供けんか神輿・消防車見学・風船飛ばしが開催され、同時に校庭で地域の方々による餅つきや花の販売などが行われた。

三庄小学校閉校式に参加された方々に校歌について尋ねた。

70代の男性は「葛原しげるさんの詩をもらっていることに誇りを持っている。歌詞はみごとに故郷を歌っている。校歌は精神性を築き上げるバックボーンになる。統廃合をして新しい小学校の校歌を作るとき、一番の勝負どころとなる」と校歌の存在意義の重要性を強調した。そして校歌をずっと心に刻んでいて、お風呂に入っているときなど口をついて校歌が出てくる」と話してくれた。

59歳の男性は「幼稚園から4年生まで過ごした。多感な少年時代を過ごしたので、ここで修業した感じで、自分の基本的なものがここにあり。」と、現在は地縁の方がいないにもかかわらず、日帰りで横浜から閉校式のために来たと話してくれた。校歌について「校歌は懐かしい。久しぶりに歌いました。50年ぶりに歌いました。心が洗われる思いがしました。そして、昔を思い出しました。一つ一つの言葉を大事にしていなくてはという思いが募ります」また「言葉を大事にする。基本となる言い回しなりが詰まっている。感覚的な表現が多いので、いろんな思いや意味がある。人生の中の深いところに存在しています。立ち位置の基本だった。心のふるさと。子供ながらに入っている。」と、そして「校歌をうたっていると涙が出ました。」とも話してくれた。「閉校式で同級生にも会えなかったけれども来てよかった。今は家族や親せきもここには住んでいないが、一番記憶に残っている場所」と、人にとっての素地を養い、心の拠り所としての原点になることが分かった。

卒業生で現在中学生の男子は「わからん」と言い、一緒にいた同級生の女子は「6年間歌った歌だからかなしい」と答えてくれた。33歳の女性は「歌いなれた歌だから、曲が流れたとき自然に歌える」「友達同士の会話の中で校歌が話題になるが、同窓会の時歌わない」と答えてくれた。50代の女性は「同窓会などで歌った」と答えてくれた。個人差があり一概には言えないが、校歌はタイムラグの存在だとわかる。

因島にあるメガネ店は三庄小学校出身の夫妻が経営している。お店に入ると三庄小学校閉校記念誌『吾が学び舎ぞ三庄』が置いてあり、お客さんとの会話が弾んでいた。記念誌を開くと懐かしい写真が掲載されており、自ずと卒業年から年齢が分かり、今まで意識していなかった先輩後輩の人間関係が瞬時に出来、分かり合える共通の話題で会話が弾んでいた。学校はなくなっても、閉校記念誌は新たな地域の絆を築き上げる力を持っている。

土生小学校はポルノグラフィティのボーカル岡野昭仁さんの出身校でもあり、映像を通してのメッセージがあった。

女優の東ちづるさんも土生小学校の卒業生、「あの6年間は私そのもの」というテーマで「…バランスをとりながら生きることを、小学生の頃に身につけることが出来たから、今の私があるんだと。そういう意味での、ノビノビと日々を送ることができたことに感謝している。学校という形はなくなっても、あの6年間は私そのものです」¹⁾と学校はなくなっても自分の素地を作ってくれたところと、土生小学校で過ごした6年間の上に立って今があることを述べている。

土生小学校卒業生であり、後に土生小学校で教鞭をとった先生は、閉校記念誌に「…子供の頃は、土生小学校の校歌の意味をあまり考えることはなく歌っていましたが、土生小学校の校

歌は素晴らしいと今思います。校歌には、かつて因島が造船の島として栄え、因島で造られた大型タンカーが世界の海と日本を繋いでいた頃の意気込みが歌われています。父や祖父や、それよりも前に生きた因島の人々が、世界を行き交い、日本を豊かにする大船を造ってきた営みに負けないように、土生小の子どもたちも自分の未来を切り開くために学び続けよと。校歌の最後に『学びの海も進まずや 鍛えて愉しき誠の腕』と歌っています¹⁾と、校歌には地域の風景や歴史がうたわれ、また、先人の偉業がうたわれており、次の世代も誇りを持って、夢、希望にむかって進んでいこうとうたっている。

未来を担う子供たちにエールを送っている校歌の歌詞を、大人の視点から見ると校歌の存在意義をより深く理解することができる。校歌には地域の歴史、伝統や知恵が詰まっていることに気付いたとき、懐かしさと共に、人生に指針を与えてくれる力を持っているといえる。学校が閉校しても、かつて通った小学校の校歌の歌詞のフレーズが頭をよぎった瞬間、校舎が蘇りその時の自分に帰れるタイムラグな存在、それも校歌の持つ役割ではなかるうか。

5. まとめ

閉校式フィールド・ワークから校歌の存在意義を考察した。

映画作家の大林宣彦さんは三庄小学校の木造校舎で1998年「あした」という映画のロケを行った。閉校式には「子どもたちへのエール～温故知新」という演題で記念講演があった。閉校記念誌にも「温故知新の木造校舎」というテーマで掲載されている。記念講演で述べられたことも、記念誌に掲載された内容も、大林監督が一番伝えたかったことは、古き良きものはしっかり守り、戦争などの過ちを忘れず学び伝えてこ

そ、未来を生きる子供たちが人類の永遠の願いである平和を達成することにあるから、閉校に伴って校舎はその役割を了えるが、この木造校舎で多くのことを学んできた先人たちの賢さと美しさは卒業生の記憶に生き続ける限り永遠の宝となると述べている。また、末尾に書かれている「因島の三庄小学校の、木造の校舎の教室よ、ありがとう。さあ、肩を組んで、まだまだ子供たちの未来のために、心の支えとなって、これからも一緒に生きてゆこうよね!・・・」⁴⁾は、力強いメッセージを感じる。木造校舎の中で長い時間をかけて育まれてきた宝物、消えることなく受け継がれてきた伝統や文化、先人の知恵など心に刻まれた学びは未来に繋がっていくことによって大成してゆくことを信じてやまない大林監督の熱い想いが、時を経て閉校記念誌を開けた時により強く次の世代に伝え広まっていく原動力になるだろう。

寄稿集の表紙には体育館に掲げてあった木板に書かれてある校歌の写真が載っている。寄稿文の中には「…祖父から父、そして子供に至るまで同じ校歌を歌ってきた・・・」⁴⁾と、その学校の長い歴史と、4世代にわたってそのコミュニティで過した証の一つ、校歌が共通の歌として歌われてきたことに誇りを持っていることがわかる。筆者が12年前に校歌の文化的役割を調査⁵⁾した時、当時の三庄小学校の児童は、校歌から連想するのは「学校」12%、「地域」18%、「風景」31%と6年間通った通学時で見た風景と校歌が結びついている。歌詞の冒頭1番「朝日に夕日に美しく」2番「朝しお夕しおとこしえに」3番「大地の恵みに海幸に」のフレーズは中学に入ってもよく覚えていて、ともに通学路や校舎から見える景色である。

ノスタルジアとは故郷への帰還を切望するという意味に由来する。アメリカの社会学者フ

レット・デーヴィスは「過去」を素材とする「情動」であるノスタルジアは「現在」の状況へのアイデンティティの形態の「主観的対象性」に基づくと述べ、ノスタルジアを「現在もしくは差し迫った状況に対する何らかの否定的な感情を背景にして、生きられた過去を肯定的な響きでもって呼び起こすもの」と定義する。⁶⁾

校歌は、閉校する学校のなかでより強くノスタルジーを漂わせ、かつて在校生だった頃を懐かしむ感情を支え、人生の岐路に立った時、過去に通っていた学校周辺の風景や学校での出来事、自分の周りの人々（両親、兄弟、祖父母、親せき、先生、友だち）の存在や関わりなどが、メロディーにのって脳裏に浮かんだら、人生に指針を与えてくれる・・・そんな役割を持っている。一人ひとり、自ずと自分ができるような働きを校歌は持っている。学校は地域文化の拠点

であり、地域の伝統と知恵が詰まっている場所でもある。その学校が閉校して「歌い継がれなくなった校歌」は、その学校に在籍していた人たちの生きている証の一部として残ってゆくであろう。

引用文献

- 1) 尾道市立土生小学校閉校記念事業実行委員会、尾道市立土生小学校閉校記念誌、2015、p.45, p.63, p.62
- 2) 尾道市立田熊小学校閉校記念誌編集委員会、尾道市立田熊小学校閉校記念誌、2015、p.7、尾道市立田熊小学校閉校記念事業実行委員会
- 3) JA おのみち 2015年3月号 (No.328)、裏表紙
- 4) 三庄小学校閉校記念誌作成委員会（編集）、尾道市立三庄小学校閉校記念誌、2015、pp.145-146, p.139、三庄小学校閉校記念行事実行委員会
- 5) 宮島幸子、校歌の文化的役割（大阪音楽大学修士論文）、2004、p.66
- 6) F. デーヴィス、間場 寿一ら（翻訳）、ノスタルジアの社会学、1990、pp.26-27、世界思想社